

### 3. 質的調査の現状と課題

#### —いま質的調査に求められるものとは何か—

山田 富秋 (松山大学)

#### I. 「啓蒙主義」以降の質的調査は何をめざすのか？

社会学や教育社会学において社会調査と言えば、現在でもアンケートサーベイを中心とした量的調査が主流である。ところが、『教育社会学研究』に掲載されたここ5年間程度の論文をレビューすれば、質的調査法をめぐる議論をはじめ、エスノグラフィーや質的調査の報告が、数は少ないものの、常に一定の割合を占めるようになってきていることがわかる。80年代からゴッフマンの『アサイラム』<sup>①</sup>をお手本として、精神病院のエスノグラフィー<sup>②</sup>を試行錯誤的に行い、さらにエスノメソドロジーや会話分析、そして構築主義的なインタビュー法の批判的な紹介を行ってきた私の立場からすれば、質的研究が教育社会学のなかで地歩を固めつつあるように見えることは歓迎すべきことである。だが、それらの論文について概観するなら、確かに臨床教育学をはじめ、教育学（教育社会学）にとって有意義な調査方法について精密な議論を展開していたり<sup>③</sup>、「データ対話型理論（グラウンデッド・セオリー）」に基づいた調査を行っていたり<sup>④</sup>、あるいは、最近の社会構築主義やナラティブ・アプローチの成果を吸収した水準の高い研究<sup>⑤</sup>も見られたが、その一方で、自らの調査方法についてほとんど明示がないままに、ただ単に学級の観察をしたり、インフォーマル・インタビューを行ったりした結果を、そのまま質的調査として報告している例が少なからず存在していることは否めない。

私がここで主張したいことは、特に1986年にクリフォードとマーカス編集の『文化を書く』<sup>⑥</sup>の出版以降、質的調査は、単にインタビューを行ったり、テキスト分析をしたり、あるいはフィールドへと参与観察すればよいという単純な試みではなくなっているということである。人類学者であるクリフォードたちがそこで批判的に検討しているのは、これまでの人類学の調査方法であり、彼らの結論をやや乱暴に要約してしまえば、社会科学の調査がこれまで暗黙の拠り所としてきた科学的方法は、もはや有効性を持たないということである。

その理由とは何だろうか？彼らは、エスノグラフィーの作成にとって核心をなす、フィールドノーツを「書くこと」自体が問題とされてこなかったことを、調査地のテントの中でマリノフスキーが書きものをしてる写真を取り上げることから始めている。そしてこの「書く」という奇妙な儀礼を観察しているのは、他にもない彼の研究対象者である、テントを囲んだ数人の

トロブリアンド人なのである。観察する者と観察される者の奇妙な逆転を目撃したこの一葉の写真は、現代の私たちに興味深いことを告げる。それは、

書くことはもはや周縁的な隠れた次元の行為ではなく、いまや、人類学者がフィールドにいるときと、フィールドから帰ってきたときの両方で行う中心的次元の行為として浮かびあがってきている。このことが最近まで描かれず、また真面目に論じられてこなかったという事実は、表現の透明性と経験の直截性を主張するイデオロギーへの固執の反映そのものである。(3頁)

ここで問題にされている「表現の透明性」と「経験の直截性」とは何だろうか。それはフィールドワーカーの表現は、調査対象を忠実に反映する透明性を有しているという前提と、フィールドワーカーの経験とはフィールドの経験の直接的な例証であるという前提になるだろう。この二つの前提はまさにシルバーマンが「啓蒙主義」と名づけた社会科学のイデオロギーそのものである。<sup>⑦</sup>

シルバーマンとグブリウムが分析して見せた啓蒙主義を少し単純化して説明すると、それは科学者＝研究者の体現する理性の光が、無知蒙昧を正しく照らし出すという啓蒙の主張にある。すなわち、研究者が理性に奉仕することによって、客観的な真理が蓄積され、それによって科学が進歩すれば、結果として研究者は「慈愛に満ちた国家」に貢献することになるというものだ。だがこの立場の問題点は、理性や科学の正しさを当然のこととしているだけでなく、啓蒙主義的な研究者が国家の装置とは独立した自律性を享受できることを前提としている点にある。その意味で、専門家は知らないうちに、例えば、国家の戦争研究の共犯者となっていることもありうる。つまり、研究者は国家から独立した「相談役」にはなりえず、常に権力に巻き込まれているということだ。

さらには、シュッツがパーソンズを批判したように、科学者の体現する「科学的合理性」と日常生活者が日々実践している「常識的合理性」とは共約不可能なものである以上、科学的合理性でもって日常世界を説明することはできない。さらには、日常世界に身体を媒介した投錨点を持たない科学者は、行為者のモデルになりえないばかりか、もし科学者が科学的発見を伝えようとしたら、具体的な身体を持ち、常識的なレリヴァンス＝類型化システムに支配されたコミュニケーション

ンの世界である日常世界に降りてこなければならない。<sup>(8)</sup>

シュッツの主張をもう少しフーコー的な権力作用論の文脈で言い換えれば、科学それ自身が日常世界の微細な権力のメカニズムの内部にあり、この権力編成から自由な超越的真理の場はありえないということだ。そして権力作用論における権力とは、例えば国家のような当該社会関係の外部にある、なんらかの中心性を持った強制装置ではなく、むしろ、具体的な状況における社会関係に内在的で、それ自体は真でも偽でもない言説において編成されていくものである。この意味で、権力作用とは人々の行為を抑圧したり、制限したりするだけでなく、人々の行為の方向性を定め、社会関係それ自体を産出するものである。したがって、啓蒙主義が想定するような自由な個人は存在せず、むしろ当該社会の中で主体化させられたアイデンティティを引き受けることによって、当のアイデンティティに従属させられる主体化＝従属化のプロセスの中に個人は存在するのである。

こう考えると啓蒙主義は、シルバーマンたちの言うように、進歩への確信、個人対国家という二元論的構図、個人を抑圧する大きな権力の想定、人間を対象とする人間科学の誕生、自由な個人という想定、以上の5つの前提からなっていたと考えることができる。しかしながら、こうした5つの前提のセットが支持できるものではなくなった以上、私たちには、クリフォードの次のことばがあてはまるだろう。

「地殻変動」ともいべき概念の転換が起きたのである。私たちは今や、事象を動く大地の上に置く。もはや我々には大地を上から眺めて、人間の生活様式を地図に描くような見晴らしのよい場所(山頂)もなく、そこから世界を表象するようなアルキメデスの点もない。山々は常に動いている。島でも同じだ。なぜなら、もはや人はそこから外界へ旅立ち、他の文化を分析できるような、はっきりした境界で仕切られた孤島のような文化世界をもちえないからだ。人間の生活は、互いにますます影響しあい、支配しあい、真似しあい、翻訳しあい、破壊しあっている。文化の分析は差異と権力の全世界的な動きのなかで、いつも放り込まれているのである。(38-39頁)

## II. 「自己」を調査の道具とするリフレクシヴ・エスノグラフィー

科学的方法論を自明視することによって、いわば自動的に科学的発見を保証されてきたこれまでの「啓蒙主義」的な調査を乗り越えるためには、どのような手続きが必要だろうか。それは自己の採用する方法論を隠したり、自明視したり、何らかの理論によって正当化するのではなく、むしろそれ自体をエスノグラフィックに顕在化する必要がある。調査者という主体も「いま、ここ」で絶えず編成されていく微細な権力作用の

## 課題研究Ⅲ. 教育研究における質的方法の可能性

一部を構成している以上、この手続きは、身体を持ち生活世界内で他者と相互行為する「自己」の足取りをリフレクシヴに再検討することになる。

これをライフストーリー・ナラティブの次元で言えば、自己の属する内集団のモノロギ的な自明性の解体プロセスを明示しながら、同時にバフチン的な対話が開かれていく瞬間をフォローすることになる。また、インタビューを回答者から回答を取り出す行為として捉えるのではなく、むしろ、インタビュアーと回答者とのアクティブな相互行為として捉え直し、このアクティブな相互行為プロセスを、それ自体エスノグラフィックな記述に付すことが必要になる。<sup>(9)</sup>

例えばそれは、高井良健一の仕事(「教育研究におけるライフヒストリー法の可能性と課題」未刊)に見られるように、ライフストーリー・ナラティブを何らかの規範に回収させることなしに、インタビューの相互行為全体を捉えようとする試みの中に見られるし、白松賢のように、調査の現場での相互行為だけでなく、その中で調査者である自己が取る位置の刻々とした変化をフォローしていく試みの中にも見て取ることができる。<sup>(10)</sup>

この意味では、オーソドックスなエスノメソドロジーや会話分析の研究も、自己の調査プロセスをリフレクシヴに問い直していく契機に欠けていれば、例外なく内閉的な、啓蒙主義的陥穽に落ち込んでしまうだろう。当日の報告では私がリフレクシヴな調査をどのように遂行したのか、簡単に例を挙げて示したい。

- 注(1)Goffman,E.,1961, *Asylums: essays on the social situation of mental patients and other inmates*, Doubleday & Co. 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房,1984
- (2) 山田富秋「一ツ瀬病院のエスノグラフィー」『解放社会学研究1号』明石書店,1986
- (3)酒井朗「臨床教育学構想の批判的検討とエスノグラフィーの可能性」『教育学研究』第69巻第3号,2002
- (4)結城恵『幼稚園で子どもはどう育つか』有信堂高文社,1998年
- (5)古賀正義「構築主義的エスノグラフィーによる学校臨床研究の可能性」『教育社会学研究』第74巻,2004
- (6)Clifford,J.& G.Marcus (eds.),1986, *Writing Culture*, University of California Press. 春日直樹他訳『文化を書く』紀伊國屋書店,1996
- (7)山田富秋「フィールドワークのポリティックス」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房,2000
- (8)山田富秋『日常性批判』せりか書房,2000年
- (9)Holstein,J. & J.Gubrium, *The Active Interview*,1995 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティブ・インタビュー 相互行為としての社会調査』せりか書房,2004
- (10)白松賢「マジックマッシュルームとは何か」『教育社会学研究』第74巻,2004